

第5回里山フェスティバル「里山シンポジウム」

22 分科会開催経過報告 (通称:2 分間報告)



司会・進行 中村俊彦 (千葉県立中央博物館副館長)

ご紹介をいただきました中村俊彦です。



毎年恒例となりました分科会の報告をはじめたいと思います。今年は 22 の分科会ができ、里山シンポジウムの活動がますます広がっていることが実感されます。

この里山シンポジウム、1 回目は 2004 年に「里山に託す私たちの未来」という題で開催され、2 回目からはこのテーマとともに各年のテーマとして「里山と子ども」、3 回目は「里山とゴミ」、そして 4 回目の昨年は「里山となりわい」というテーマを掲げました。

今年は「里山と生命(いのち)のにぎわい」として、まさに、にぎにぎしく 22 もの分科会ができました。これからその報告をはじめたいとおもいます。全ての報告のあとに、「里山と生命のにぎわい」に関するアンケートをおこないまとめております。私の方から最後に報告をさせていただきます。それでは、1 分科会 2 分でご報告をお願い致します。

第1分科会 里山と森林・林業



稗田忠弘です。私たちの森林林業分科会は、今年は山武市の後援を頂きまして山武市でいたしました。分科会の一貫しているテーマは、山武杉を使った住まいづくりを核として、自然、経済、産業の3つが循環する「地域循環型」の地域をつくることです。今年はぜひとも山武市で行いたいと、それは今年から山武杉を使って建てる住宅には助成金が出ることが決まりました。

これから作る中学校の内装を山武杉でやろうということも検討されています。そして画期的なのはすべての教室に冬季の暖房用として、山武杉の廃材を使ったペレットストーブを入れることになりました。これはとても大事なことで、ペレットも何十台分が一度に入りますので、一度に稼働を始めますと、千葉県ではじめてのペレット製造が山武市で始められる可能性を持つことになるわけで、その可能性のある山武市で、小さいながら地域を少しでも変える力になる分科会を開催したいと考えました。

参加者は63名。一般、森林関係、行政、地域住民と、第2分科会の「里山と技能伝承」との共催となりましたが、大変活発で有意義な分科会であったと自負しています。ありがとうございました。

司会：里山の活用として、廃材ペレットなどのバイオマス燃料に大きな期待がかかっています。

第2分科会 里山と技能伝承



木下敬三です。稗田さんがペレットを作ろうということは、稗田さんが建てた家の山武スギの切れ端をもらってきて、それでペレットを作る。そのための事業を進めるためのNPOを設立準備中です。山武の里山は、かつて、ほとんどの時季に人が入っていました。山に入って、食べもの、家の材料から遊びまで山で培った。しかし今はほとんど入らなくなりました。しかし今は、入っても私どももそうですが、何かをするということになると、そこで昔から伝わる技能というか、自分たちが里山に入っても技能がなければ何もできない。かつて自分たちで作っていたものを、いま自分たちで作るそのために必要な技能を伝承しよう。

ほとんどはスーパーで売っている状態なのですが、自分たちで、田んぼまでやろうということが一つの見直しのスケジュールとなります。まずは茅葺き屋根のふき方、地域に現職の80歳近い職人さん、佐藤さんといいます、がおられるので、少しでも学んでそれを次に伝えていく、そんな講座を始めました。

1年目は茅葺き屋根、2年目は藁づくり、3年目は大豆。大豆を作ってスーパー製品になってしまっています。それを自分たちで、はじめから豆腐やしょうゆやみそを作ろうではないかと。3年計画で大変な事業だと思います。ペレット作りもそうですが、今の里山はほとんど忘れられている技能。何としてでも少しでもその技能を取り戻そうと考えています。

山武市は4つの市町村の合併で、山から川から海まで、山武市を流れる2つの2級河川。それにはサケやアユなども遡上してきていて、自然条件が本当に豊富なのです。だから、里山に入ってナイフ一つとっても使い方がわからない。技能をもってから里山にまず入るための手立てを身につけて入らないと、ということになりました。

司会：里山文化の伝承を、みんなで学習し直すことが重要だというお話を頂きました。

第3分科会 里山と観光と食



遠藤イサムです。房総の中山間地域、南房総市平群（平久里）に茅葺の民家、屋号は「ろくすけ」をお借りして「ワクワクするフィールドに出来ればと「南房総ワクワク村プロジェクト」と称し取り組んでいます。今年は、母屋の一部の茅の葺き替え、長屋門・土蔵の掃除・畑の耕起・周りの水路の掃除などを行いました。作業をすることによって、民家「ろくすけ」の当時の暮らしが少しずつ見えてきたような気がします。

知識として「里山」の文化を学ぶことも大切ですが、出来れば、「里山」といわれていた環境と暮らしとの関係を、作業を通しながら感じ、潜在意識に刻み込むような事が出来れば「里山」といわれる環境がおのずから見えてくるものではないかと思っています。

「里山」は、人の手で作れる（造れる）「もの」でもなく、作られる（造られる）「もの」でもないと思います。営みながら見えてくるものではないでしょうか？

今後も作業を続けていきますので、多くの方に参加していただければ幸いです。

司会：里山に観光としても、千葉に是非多くの人に来ていただきたいと思います。

第4分科会 里山と動物福祉



石山大です。代表の中野真樹子さんに代わり第5分科会と共同開催し、30名が参加しました。

千葉県は素晴らしい自然、特に里山と谷津田に恵まれて稲作、園芸作物、酪農も盛んなところですが、でも残念ながら、鳥獣害の被害の盛んなところでもあります。そこで我々は、野生鳥獣害からの被害対策として家畜の放牧と野生動物および飼育動物についての話題提供を行いました。

まず自然共生をしながら被害防除策として家畜の放牧など、野生鳥獣と家畜について松木先生に講演をいただきました。里山農業の多面的な役割を認めた上で、それを推進するための助成に関して、お話をいただきました。EUにおける家畜福祉や、日本における先駆的な農業など参考になるお話をいただきました。

次いで、森林管理に於けるGISの役割ということで京都府立大学の田中和博教授にお話をいただきました。教授はGISを使った京都府でのクマ対策を研究している方なのですが、千葉県でのGISの利用、鳥獣外への対策として具体化には、猿やアライグマ、キョンなどの外来種の跋扈が問題になっていますが、それへの利用が可能になるのではないかと。希望の持てる農業のお話をいただきました。

統合ディスカッションでは農業の再生、特に工業的な農業を脱した多面的な価値をもった、家畜動物への福祉を高め農業の多面的な活性化、生活環境の改善し、千葉県で面白い農業をおこなっていかうと。話を継続していこうということで話を決めました。

司会：イノシシやシカの問題は深刻ですが、かつての里山には野生動物と人間の関係はバランスがあったのではないかと思います

第5分科会 里山と水鳥と農業



荒尾稔です。今回は里山と動物福祉、第4分科会と共同開催となりました。第5分科会では千葉県に渡来する渡り鳥、湿地の埋め立てと銃による乱獲などによって壊滅的状态になっているわけです。南北アメリカ、欧羅巴、アフリカ大陸間の渡り鳥の総数を100としてアジアは30%以下となっています。その原因の一つは、越冬地であります利根川下流域の湿地、印旛沼周辺、東京湾の浅瀬が壊れてしまったことがあります。

利根川下流域を復元させるには、湿地をどう復活させるかにかかわってきます。日本雁を保護する会では、その復元に湿地をどうするかということから、「ふゆみずたんぼ・不耕起栽培」を推奨しており、すでに千葉県でも印旛沼周辺では、その方式での大規模な田んぼがすでに出現しています。

最近、鳥インフルの問題が生じております。秋田県十和田湖畔等で白鳥群が感染したとの報告を受けています。その中で人とのあまりに密着した関係を築いてしまったことから、野生動物とは一定の距離間を保とうということ、白鳥を餌付けから自立させるという動きが急激に盛り上がっております。

「ふゆみずたんぼ・不耕起栽培」は受け皿として最適であると考えられます。また別の角度からも同時に、千葉県には白鳥の渡来数が急激に増えてきていますが、餌付けを避けることで、個体数管理をハクチョウ自体がするような流れを生じています。ふゆみずたんぼ・不耕起栽培を利根川下流域に5ヶ所。白鳥や雁類を定着できる個所を農家の方々と話し合い、将来田んぼを湿地によるラムサール登録湿地につないでいけたらと報告をさせていただきました。

司会：千葉の水鳥は、農業と密接に関連していた。その良き関係を再度復活させることが重要です。

第6分科会 里山と里海



手塚幸夫です。房総半島の太平洋側の真ん中にあるいすみ市から来ました。今回初めて里山シンポジウムに参加しました。分科会の開催はこれからです。開催時期が遅くなったのは、ゲンジボタルの出現に合わせて、5月の末に企画したからです。まだ決まり切らない部分がありますが、概要はほぼ固まりました。私たちの分科会は基本的に里山シンポジウムのテーマである「生命のにぎわい」を流域全体としてとらえて、生物多様性の視点から見た時に、郡部の里山と里海がどうなっているのか。さらに、そこに住んで、僕らは何をすべきなのかを議論出来る場を提供できればよいと考えています。特に質的な問題を郡部では問わなければならないだろうと、単に緑があるから豊かなのかという視点を、もう少し突っ込んで議論できないかなと考えています。

私たちは里山に「里海」をテーマに加えたので、当日は分科会の始まる前に15分ほど、海に出ます。海から里山を見てみるとどういう風に見えるか。それをスタートとして漁協の方の話、流域の方の話、山に住む方の話を少しずつ報告していただき、総合的な議論をしていきたいと思っています。加えて、残土産廃を含めた里山と里海を脅かしている脅威とは何だろうということも視野に入れて議論していきたいと思っています。そして午後5時終了後、7時頃からゲンジボタルの観察を加えたいと思います。スタートと終わりにオプションが入っています。なお、5～6千円で宿泊の手配もしたいと考えています。

司会：いすみ川流域には、豊かで美しい自然が、海から山まで残っている場所です。

第7分科会 八千代と里山



八千代市の環境保全課の高橋秀文です。この分科会については、市内の環境団体の要望を伺いながら、連携をしながら実施してまいりました。

テーマとしましては、講演を2つ、そして八千代市から施策を報告しました。講演としては、「里山の意味と保全」として東京情報大学のケビン・ショートさん、そして「里山の生物多様性と市民による生物モニタリング調査」について、日本自然保護協会の福田真由子さんに講演してもらいました。

それでは、今回、講演して頂いたケビンさん風に紹介したいと思います。

え～人は昔から里山で自然とバランスを保ち暮らして来たんだね。美しい原風景、文化、歴史、食文化、持続可能な暮らしと知恵のある生活の場として、人間と自然のつながりを取り戻す環境教育の場であり、生物多様性の高い環境の場、国民の癒しの場としてとても大切なんだね。千葉県の水田は渡り鳥の生息にとっても大切。国際的な渡り鳥の保全の場として役割を果たしています。

保全のためにはNPOの役割はとても大事。でも、NPOに出来ることは限りがあります。農家にとって、自然にやさしい農業が有利である状況を作ることが大事だと思うんだね。

司会：八千代市で、里山シンポジウムの第3回の全体会を開催しましたが、その後も自然保護には熱心に取り組んでいただいています。

第8分科会 千葉市の里山と農業



千葉市役所農業振興課の萩原康弘です。5月25日に千葉市の若葉区富田町で、「千葉市の里山と農業」をテーマにする分科会が開かれます。午前中は、千葉市が「里山地区」に指定している「いずみの森」で、自然観察会が開かれます。また、その森を管理している、森林ボランティアの人達の活動、草刈や、樹木の伐採を見学していただきます。

千葉市には、この「いずみの森」のほかに、緑区平川町に「ひらかの森」、若葉区小倉町に「おぐらの森」があり、3箇所合計で10haの森林を「里山地区」として指定しています。

指定の目的は、市民の皆さんの身近な自然である里山を保全し、森林の公益的機能の確保、さらには景観の維持を図り、それによって、里山や森林に対する市民の皆さんの理解と関心を深めていただくことです。

こうした森には、クヌギ、コナラ、イヌシデ、スギなどがみられ、都市化が進んだ千葉市においても、昔ながらの里山の風景を見ることができます。駐車場や遊歩道があり、気軽に里山の散策や森林浴を楽しむことができるよう市民の皆さんに開放されています。25日の午後からは、「いずみの森」近くの畑で、千葉エコ農産物の収穫体験、また、富田都市農業交流センターで、地元の食材を使った料理とレシピの紹介、千葉市農業施策の紹介、最後に意見交換会が開かれます。

千葉市は、県内でも有数の、農業が盛んな地域です。市内の農業の現状や課題について知ることができます。千葉市は、都市と農村が近接しているという恵まれた立地条件を活かして、都市部に住む人たちと、農村部の人たちと一体となって里山の保全や農業施策を実施しています。まだ、参加人数に余裕がありますので、希望される方はご連絡下さい。

司会：千葉市の谷津田・里山の保全については素晴らしい事業が展開されています。豊かな自然と都市の人々との交流がさらに高まっていければと思います

第9分科会 我孫子市と里山と農業



我孫子市岡発戸・都部谷津ミュージアムの会の木村稔です。我孫子市ではこの2月に、「生物多様性をはじめとする里山保全と人づくり」として分科会を開催しました。ちなみに、我孫子市は利根川と手賀沼の間に位置していて、谷津ミュージアムは、その中央にあつて、水域をつなぐ水と緑の回廊として大事な場所です。狭い地域ですが、かなりの動植物が生息しています。

近年は田んぼの復元と環境の整備を行い、ヘイケボタルとアカガエルが復元し、爆発的な増加をみました。今年はさらに生物多様性を深めたいということで、谷津田の中央部にあつて、現在は住宅地からの排水路となっているかつての小川を手賀沼と直結させるといいますか、段差を解消して魚が遡上できるように復元して、そこで子供が水遊びできるように計画をしています。

当分科会での報告の一つが、田んぼ広場の取り組みの報告でした。新たに、地元の農業者と市民が一緒になって、復田作業を行いました。芦原となっているところを草刈りして、根を切り、畦を作りました。そして、代かきをやっとうることができて、田植えにこぎつけ、夏場の草取りを行い、秋にととうとう収穫までこぎつけました。この作業を通じ、公募した一般市民の方との交流や、指導を仰いだ農家の方々との交流ができました。

生物多様性と同時に大事なことが人の育成ということです。横浜の舞岡公園の小林哲子さんをお願いして、どうしたら人を育てられるかを講演していただきました。

それにはまず情報公開することと、なるべく討議をしてとことん議論をつくすこと、そして人づくりを継続的に行っていくことが大切との内容でした。

司会：我孫子市では谷津守人という里山を担う人材育成に頑張っておられます

第10分科会 里山と残土・産廃



井村弘子です。まず写真をご覧ください。木更津の港から陸から、またまた山砂が羽田の空港の拡張に持っていかれています。千葉県は40年前から、木更津や君津などから山砂を30億トンも東京・神奈川にもっていかれています。

ここ数年下火でしたがまたはじまりました。木更津では毎日、1日3000台ものダンプ群が、多いときは1日8000台も高速道路を通過して羽田へ行きます。今度は別の話ですが、いま風の丘、という10年程前に真里谷というゴルフ場ができるという話で、結果、できませんでした。

今、この森や土地だけを取得し遊んでいた土地に「農業法人・風の丘」が、残土をここに持ってきて、農業を残土で始めると、10月には胡瓜(キュウリ)を植えて、12月には出荷すると、それを県がなぜ許可するのだろう。30haで農業を始める。残土で農業ができる、県側は、何の問題もありません。条例には何も書いてありません。それはおかしいといっても残土の件は安全食品課で行って話をしてくれとのこと。

縦割り行政がだめです。里山一つ一つに残土産廃問題が黒く覆ってきています。私どもはそれを撤廃したい。よろしくご協力をお願いします。

司会：かつて、全体会で「里山とゴミ」のテーマでかなり突っ込んだ議論をしてきましたが、まだまだ足りないなという感じです。

第 11 分科会 里山と森づくり



星野正人です。植樹祭ということで、3月8日に千葉市緑区小山町観音寺で植樹祭を行いました。

この土地は地元の地主の方が相続税を滞納しその対策もあって地元産廃業者に土砂採取をやらせたのが始まりです。行政の指導があっても止まらず、約一年後、本格的な中堅産廃業者が産廃計画を持ち込む形になり、法律に基づいた産廃計画の申請が出された後に一般の市民の知るところとなりました。地元の住民の方も2/3以上の方が反対していることから、あすみが丘をはじめ市民、土地改良区が6400の反対署名を行い市議会に請願、満場一致で採択され、計画は停止されました。

その後一年経って申請事業がこう着状態であることから、国税局は跡地を公売にかけました。産廃を何とか止めようと地元の土地改良区が競売に参加を決め、3000万円を越える金額で、当の産廃業者との一騎打ち65万円の僅差で土地改良区が競り勝ち落札できました。

土地改良区の皆様は農業をやっていますが、農業を維持するだけでも大変な時代です。その中で孫子の代までコメを作り環境を守るとして頑張ったとしても、現実には厳しくて、この土地をどうやって維持管理するのか。自然環境を守るために買った土地を市民だけでは維持が困難である。ヨーロッパなどでは緑の回廊などとして買ったりしているように公共の緑地施設として公園などに利用していただければと思います。

それまでは地元の土地改良区が中心になって、地元の方々と協力をして、はげ山ではだめですから、息長く木を植えて手入れをしていこうと考えています。午前中に植樹祭を開催し、午後からは、分科会として意見交換を行いました。長いスパンをかけて自然の森林に戻す運動を行っていきたい。一過性で終わらせないで、運動を盛り上げていきますので皆様よろしくお願ひいたします。

司会：市民の方々の協力を得て、土地改良区が素晴らしい里山復元を展開しているのですね。

第 12 分科会 里山と WEBGIS 情報の活用



荒尾稔です。今回のこの全大会は5回目の里山シンポジウムで、早や6年目に入っており、啓発の段階からこれからは実践段階に至るだろうと考えています。生物多様性を担保しながら、なりわい(生業)の、もの作りの場としての里山を見つめ直し、何を考え、何をすべきであるかとして真剣に議論する場。その第1回目に、今回のテーマとして取り上げました。

市民と行政が対等な立場で連携してWEBGISを活用して、情報を発信していく事例を、これからの基本と考え、京都府と宮城県と千葉県から、4名の方々に発表をいただきました。また、京都府立大学の田中和博先生からは、データの情報を統合する仕組みについて、いろいろと工夫をご提案いただきました。

「日本雁を保護する会」の呉地正行様からは、メンバーは、北海道の極寒地で早朝4時ごろから雁の飛びたち数のカウントと観察をするなど。「ムクロジの里」の山崎輝清様からは、市民が3~5年10人もの方々がかかわり、情報収集を週に1回。それが1年や2年ではない。となると、その実行主体の意味合いと、市民同士が情報を介して、共同しての作業責任を分かち合い、監査をする仕組みを介して、それを通じた社会教育、そして監査手法の構築に結びつくと考えられます。

結果として、安定して、継続性のある市民からの情報として、県や国等で使う監査されたデータとを協調し融合して、とてもよい関係を築きながら、統合したWEBGIS情報として発信される。この連動させる方法が見出したことが、今回のこの分科会の大きな成果であります。

司会：WEBGISというこの文明の利器が、日本文化発祥の里山と結ぶ時代になりましたね。

第13分科会 里山と政策1



金親博榮です。里山と環境税、森林税の勉強会として 千葉県での森林の現状を知らない県民がほとんどと認識しています。といいますのは一部の里山の所有者や農業者が背負っているだけで、都市住民への意識の浸透はまだまだだろうと、再生のあり方をする前に、現状を知ろうということです。

森林環境税の導入の条件は、どのようなことであれば県民が受け入れやすいのかということで、これらの話は昨年度に次いで2回目となります。日本

全国の70%が森林、しかし千葉県は、その1/2。16万ヘクタール。居住地と田んぼ・畑、そして森林がちょうど1/3のバランスの良い百貨店の如くになっている。

千葉県の特徴は都市近郊の小規模な森林で、農林業との兼任となっていて、木材の製材業が困難である。先ほど千葉県でアンケートを取ったところによりますと 都市内にある林、近郊林、そして安房地域の山林の3つのバランスではないのかという意見。ひるがえって47都道府県のうちで、すでに31県が環境税をすでに導入済みであります。千葉県においても、県民税の上乗せが、里山や田んぼに意識を集中させるべき時期にではないかという提言です。

京都議定書での山林でのCO2確保は1.9万haしかし、本来千葉県が担うべきであります、しかし財政上と担い手の問題から、実際は5,150haにとどまっています。

今後の里山と生物多様性立県を標榜しているわけですから、これを皆でバックアップしていこうという趣旨で話を聞きました。

司会：環境直接支払いそして環境税、まさに里山は皆の国有財産として公的資金の導入が急がれます。

第14分科会 里山と政策2



小西由希子です。民間型環境直接支払制度と生物多様性農業について「田んぼの生き物調査プロジェクト」の原耕造さんから、お話を伺いました。まず、原さんから日本のコメ政策がおかしいのではないかという提言。では世界ではどうなっているか、という観点から世界の農業の話がありました。1992年ガットのウルグアイラウンド以降、環境と農業政策が一緒に取りあげられてきました。EUおよび韓国は、時期を同じくして環境と農業政策を一体化して取り上げています。1992年は、地球環境サミットが開催された年度でもあるということです。

農業による所得をきちんと保障していこうという考え方では、農業の一体どこに何を直接支払っていくのかということですが、農産物の生産高だけでなく、環境保全とか景観保全がしっかりと役割を果たしているということを国民は知らなければならない、ということを議論として起こしていくためには、民間がまず環境直接支払いを導入していこうとしているのだとの提案がなされました。

気候・風土・文化は農業との関わりが深く、それらを示すものが生物指標です。環境直接支払いとは、その生物指標に対価が支払われるものですが、それらを調査し、裏付けしていくためにも生物多様性農業支援センターを立ち上げたいという提案がありました。消費者がキッチンと向かい合って、そしてその農業に対しどう関わって支払うのかということにおいて、農業が育む環境保全、生物多様性に保全に対価を支払うという議論を起し、まず民間が取り組むことによって、農業が暮らしを守るのだという認識を国民の多くがもっと持つべきであるということです。民間が先行して環境直接支払を開始していく中で、皆様と議論を行っていく必要があると認識しました。

司会：農業の環境直接支払いは欧米では当たり前のことです。食料及び生物多様性を担う里山が直接支払いを受けることは当然の事です。

第 15 分科会 里山と医療・福祉



増田淳です。私どもの分科会では森林療法を行っています。森林療法という病気の人以外は参加できないというイメージあるということで、最近森林セラピーという言葉を使って、一般の方々の参加を募っています。

お陰さまで、5年間にわたって開催をさせていただいております。1年間では5、6回、千葉県の中のいろいろな個所を選定しながら行っており、現地の方々や福祉施設関係の方々とともに森林の中を、時間をかけながらゆっくりと歩く。身体表現ですね、動作を変えながら歩く。急ぐのではなくゆっくりと話しながら、マイナスイオンを浴びて癒し、セラピー効果が得られる。これは一人やるのでは効果がなくて、みんなでやるから意味がある。安心して歩ける、そして知的障害者も、数多く参加していただいています。

今年から参加者には絵を書いていただいています。そうしますとあまりうまく話ができない人もこのように絵を描くと、自分の心でうまく表現できないことも表現できるようになる。そのような絵をなるべく同じ方に何度か参加してもらって、1年2年でどのような変化があるか、後日提言できればよいと考えています。ぜひ多くの皆様方のご参加をお待ちしています。よろしくお願ひ申し上げます。

司会：里山・森林と医療・セラピー、また子どもの教育に関する研究そして実践は、千葉県が最先端を行っています。里山の利用は私たちの健康とも大きくかかわります。

第 16 分科会 里山と伝統・文化



清藤一順です。私どもの分科会では、これまでも縄文時代から江戸時代までのわが国における人々の生活と自然のかかわり、わが国の里山の景観と文化の関係について検討してきました。このようなテーマでは3回目となる本年度は、5月10日、中央博物館で分科会を開催し、里山がいつごろから発生し、今日までどのような歴史を抱えてきたのかを検証しました。

参加者は12名程度と少なかったことは残念でしたが、より緻密な検証は行われ、内容の濃いシンポジウムであったと思います。3回目の開催で、当分科会の課題もかなり整理され、里山の開始が約2000年前の弥生時代後期にあると考えられ、以降、永い歴史の中で里山の開発と保存が人々の信仰や規範、すなわち文化により、今日まで里山の保全につながってきたという結論を得ることができました。今後、これまでの成果をとりまとめることにより、当分科会での私たちの役割を終わらせていただきたいと思います。

司会：現代の里山の起源は、縄文時代が終わった約2000年前からの弥生時代にあると、長い歴史の里山の見方を話していただきました

第 17 分科会 里山と教育



佐野郷美です。本日の配布資料の 8P をご覧ください。この写真を見ると、湿地があって、水田があって、コブシやヤマザクラが咲いています、いかにも里山の雰囲気でしょう。…

でも、実はこれは学校の一角なのです。私が勤務する千葉県立船橋芝山高校のビオトープ「里山生態園『芝山湿地』」です。

周辺に住宅が迫っていて、せいぜい 25m プール 2 つ分の広さしかありません。しかし、この小さな学校ビオトープに、千葉県レッドデータブックに掲載されている絶滅危惧種のうちの 25 種類がここで確認されています。つまり、地域の生物多様性を保全する場になっているのです。そして授業でも活用しています。また、生徒のメンタルケアのために、養護教員がここに生徒を連れてくることもあるそうです。

分科会には 42 名の方が集まり、芝山湿地がどのように整備されたのか、維持管理の方法と生息する生物などについて説明した後、現地を見学していただきました。その後学校ビオトープの可能性と課題等に関して話し合いを持ちました。

県内では小学校を中心に学校ビオトープがたくさんできているのですが、担当職員が転勤等で異動すると維持管理がうまくいけなくなり、荒れ放題となって、授業にも使われなくなってしまうことが多いようです。芝山高校では人事面での配慮があって後任者も積極的にビオトープに関わっているが、これは県内では異例であり、ビオトープの劣化を回避するためにはビオトープの維持管理を学校の中だけで完結せず、保護者や NGO・NPO 等地域と連携しながら進めていくと割とうまくいくことが報告されました。そこが最大の課題だと思われます。

司会：子どもの生命の体験を充実させようと、千葉県では学校ビオトープを広げていく取り組みをはじめました。芝山高校のビオトープは素晴らしいお手本です。

第 18 分科会 里山と生物多様性 1



鈴木優子です。「12 月にアカトンボが飛んでいる。変だね。」から、この分科会は立ち上がりました。当日は里山の生物多様性をおびやかすいろいろな問題の中で「温暖化と外来種」に関して、市民との意見交換をしました。行政の方々も参加をいただきました。

生物多様性千葉県戦略では、グローバルに見ても千葉県で見ても、生物多様性の劣化が進むこの時期に、全国に先駆けて千葉県方式で生物多様性を策定できたと紹介されました。グループ会議やタウンミーティングを開催した私たちもその結果が実感できました。これからは生物多様性と、なりわい(生業)の視点を組み込んで施策として推進していくことが、大事なことで、新しいことだと受け止めました。

市民との意見交換では、「今年の春はコブシもサクラもモモも、いっぺんに咲いた。ずれているなど感じた。外来種のアライグマが、この近くまで生息している痕跡があります。虫は一年中いて、しかも多くなっている」という声もありました。

農の現場からや動物、植物まで 5 名のパネラーから報告もいただきました。若い東京情報大学の院生さんからも、「千葉県に於ける温かさの指数と植物の分布図」の発表を聞いて、とても心強く感じました。

司会：今の報告をうかがって、私も生物多様性の専門家の一人として、これから頑張らなければいけないと感じました。

第19分科会 里山と竹



田代武男です。千葉県内の竹は温暖化ということもありまして、拡大の一途をたどっております。竹林が放置されますと生物多様性に影響があり、多様性が失われて来ているのが現状です。何とか竹の害を排除しなければなりません。伐竹だけでは退治できません。竹の害は地下茎にあります上だけを切っても絶やすことにはなりません。

地下茎を絶やさなければならぬのですが、あえていわせていただければ、適正な農薬に使用は必要ではないかということが私の主張です。孟宗竹、真竹は竹の管に薬剤を注入することができます。薬剤を注入することで地下茎を殺すことができます。この竹蓋排除を行わない限り竹との戦いは困難だと思っています

私は成田の竜台というところで5000坪の土地を用意して竹の故殺実験整備を重ねてきました。5月10日は、その現状を見ていただいて古刹整備を、必要な情報を提供したいということでシンポジウムを開かせていただきました。

分科会当日は32名の方が出席していただきました。こちらの写真ですが、竹林黄金セラピーと書いてありますが、放逐された竹林を健康増進や健康回復に利用したいと、竹は日本的なものですので森林セラピーもよろしいのですが、可能性がある実験田を作っています。

司会：薬品まで使って、増えすぎた竹の駆逐に努められているとのこと、とても深刻な状況だと思います。

第20分科会 里山と水循環



桑波田和子です。これまで、里山と水循環分科会は、谷津田や湧水の仕組みなどを勉強し、現場を見て学んできました。今年は湧水などが集まり流れる川についての分科会を開きました。川の生物多様性の観点から、再生した川の例として松戸市の坂川、再生に取り組む川として、千葉市の都川について話題を提供していただきました。

松戸市にある坂川は、かつては、悪臭がひどいドブ川だったそうですが、官民挙げての総力を結集し浄化に取り組んできました。今では、アユまですめる都市河川として蘇えりました。長い時間をかけて官民で再生に取り組んできた結果、水の浄化と合わせて生物が豊かになると、人までもが水辺に戻ってきたとのことでした。

次に、再生へ取り組む川の例として、千葉市の都川についてです。整備目標は、「故郷の原風景と生物にふれあえる田園公園」で、市民からのアンケートや生物調査などを基に、多様な動植物が生息・育成できる自然環境保全と再生に取り組んでいます。市民・企業・行政のパートナーシップを計画のときから参画して進めています。

分科会として、河川改修などが発案された段階から、市民もその計画を推進する一員として参画してゆくこと、即ちその環境に関わる市民・企業・行政のパートナーシップを推進し、一体となって環境を維持できるような仕組みを作ってゆくことを提言します。

司会：命のにぎわいを考えたときに、水というものはなくてはならないものと考えます。水と里山、計画段階からということです。

第 21 分科会 里山と都市緑地



山田純稔です。都市の中に残っている里山に目を向けてほしいと思い、里山と都市緑地分科会を立ち上げました。会場は松戸の「関さんの森」です。1.1ha の屋敷林と梅林と畑などの合計約 2ha がフィールドとなっています。個人所有の森ですが、このうち 1.1ha は埼玉県生態系保護協会に寄付されています。なぜ埼玉県なのかという質問をよくされるのですが、残念ながら千葉県や松戸市には受け皿となるような団体がないの

です。

1. 都心に残された里山は価値が高い貴重な場所です。毎年小学生だけで 2,000 人が見学に来ます。公共性が高い。だから残したのです。しかし残すことが大変です。ひとつは市街化区域内ということで相続税の問題です。

2. もう一つは周辺にお住まいの方々のご理解の事です。日照の問題、落ち葉の問題とか、いろいろな苦情がきます。さらに、今、関さんの森に道路問題が迫っていて大変なのです。都市の中の里山は、残すこと自体が大変だということをご理解いただきたいと思います。

3. 私たちは道路については迂回してほしいという形で提案していますが、松戸市のほうは強制収用も辞さないということで困っています。皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます

千葉県は生物多様性ちば県戦略を作りました。都市の中に残る緑の重要性が再認識されたと評価しています。今、関さんの森は、道路問題で揺れています。車にとっては少し不便かもしれませんが、温暖化を促進する車を大切にするのか、それとも生き物や教育を大切にすることが問われています。生物多様性を育む関さんの森を何とか残したい。7 月 21 日にシンポジウムを開催します。ここを本格的にエコミュージアムとして残したい。ご賛同いただける方々のご参加をお待ちしています。

司会：都市の中の里山は、特に子どもたちにとっては大切なところです。「関さんの森」も子どもたちのためになんとしても残しましょう。

第 22 分科会 里山と生物多様性 2



加藤賢三です。この分科会はホタルを中心に生物多様性を考える分科会です。ホタルは環境のバロメータともいわれますがホタルはとても興味を持ってくれる方々が多く、非常に良い環境の指標となります。

里山には森林の部分と谷津田の部分がありますが、ホタルの側からいえば、森林にはヒメボタルやクロマドボタル、水辺にはゲンジボタルやヘイケボタルがいるということで環境の違いを、ホタルから見ることができます。内容としてはホタルから見えること、そしてホタルを地域にど

のようにして残していけるのかについて考えました。

分科会の基調講演には、日本と中国のホタルの多様性ということで、大場義信先生にお話をいただきました。その結論としては、日本のホタルのルーツが中国にあったということでした。

千葉県のホタルについても、ゲンジボタルの上陸の話、房総半島のヒメボタル、クロマドボタルなどの報告をいただきました。そのあとで富里や四街道や八千代から地域のホタル事情の報告もいただきました。ホタルの保全というだけでなく、ホタルの棲める場所の環境づくりまでを一緒にやっということでした。

司会：千葉県の里山、里海、そして里沼、ホタルをはじめ生物多様性の重要地域として保全しようとする大きく広がる取り組みをお話し頂きました。どうもありがとうございました。

アンケートから

時間なのですが最後に生命のにぎわいについてのアンケート結果を発表するお約束になっています。簡単に結果報告をさせていただきたいと思います。「生命（いのち）にぎわう里山にするには何が一番必要か？」という質問で、皆さんからメール回答していただいた結果をまとめました。

一番多かったのは、自然を体験・尊重する、またそのことを教育普及すること、という回答でした。われわれはもっと自然を尊重しなければならない。里山の自然は心の糧である。そういうことを含めてもっと大切にしよう。教育の観点からもしっかりと考えるべきという答えなどでした。

二番は、地域の振興に里山を役立てる、また地域振興だけでなく地産地消をしっかりと、地域を自立させていくというものです。もたれあいではなく、自立を前提にした助け合いを基本にして支援しようというものでした。

三番は、環境直接支払などの農家をみんなで支援しよう。また、ふゆみずたんぼや不耕起栽培、農薬農法、これらを推進し、農家にとって大変なことも市民・行政が支援していくべき。さらに、緑地や生物に関しての調査をしっかりとこない、生命の連続性を確保していくこともあげられました。

里山の根本的な課題の一つである産廃やゴミ問題についてはしっかりした規制が必要、また環境税による谷津田や里山の保全と公有地化対策、さらに道路建設や土地改良のコンクリート化等の開発の規制、木材等の里山資源の新しい利用と言ったことが皆さんから寄せられました。

里山の産廃やゴミ問題については里山シンポジウム第3回の中心テーマとして議論しましたが、地下水汚染にもつながるこの問題は、特に私たちの生命にかかわる水の将来にとっては深刻な問題だと思います。

課題の多い千葉の里山ですが、まだまだ素晴らしい里山もたくさん残されています。この写真の里山は私自身がヘリコプターから撮影したのですが、まるで森林に囲まれた高原のリゾート地のような感じです。房総丘陵の一面にですが残念ながら場所がどこだか特定できていません。この桃源郷のような里山、どなたかお心あたりの方がいらしたら教えてもらえればと思います。

これで分科会報告を終了させていただきます。皆さんありがとう御座いました。

